

『新・職人宣言』と職人館

写真の『新・職人宣言』ふきのとう書房、1999年を再読した。6月23日にレポートした『農村発・住民白書 2021 信州宮本塾』で、職人館の北沢正和さん「公務員から料理人への師匠は内発的発展論と社会教育学」を紹介した。書棚の片隅にあった本書を久しぶりに再読して、信州佐久の職人館を訪ねたこと、北沢さんのことを思い起こした。

本書は宮本憲一先生、信州デッサン館・無言館の館主であり作家の窪島誠一郎さん、社会教育家で元望月町長の吉川徹さん、そして北沢さんの座談会などを編集したものである。座談会は職人志向、思想職人、職人思考、職人の未来という4章で構成され、現代の農山村、職人の手仕事と生き方など、多くの示唆に富む発言が続く。ここでは、宮本先生による「職人の手仕事と地域の未来」の一部を紹介する。



「北沢正和君は芸術家の作品だけでなく日常の生活のための作品をつくる職人の仕事を紹介してきた。これは日本ではなくなりつつある手仕事を残すためのよい仕事だった。そして、自らも、いまはそば屋という手仕事で生活をしている。」



彼は私によい話をしてくれた。「学ぶとは自立することである。自立とは自らの価値を社会にみとめさせ、自覚的にそれを社会的仕事にすることである。」「人びとが戦後、すててきたものに価値がある。すてられた農村は資源の宝の山である。」これは北沢君の口ぐせだが、たしかに、日本社会からすてられた農村山こそが、いま宝物である。

宮本先生は座談会で次のようにも発言している。「職人館に来て、北沢君としゃべるのは、ただ、おしゃべりをして、美味しい蕎麦や料理食えるだけじゃなくて、そこで何かを考える。お互いに交わし合った考え方や言葉で、自分の中に沈殿してくる何かをね。」

写真下は「まったく両腕を失ってしまった画家の水村喜一郎氏が当館で展示会をした折に、付近の風景を、口に筆をくわえて描いてくれたものである」と北沢さん。この写真の風景に見覚えがある。信州小諸からバスで職人館を訪ねたときの風景だ。本書冒頭に「職人館は、八ヶ岳北麓のなだらかな山並みに囲まれた、のどかな田園風景の中にある建物です。信州の山里にある普通の古い民家を再生させ、蘇らせました。」



美味しい蕎麦と手作りの料理を堪能して、北沢さんと議論したことが忘れられない。

(2021年8月26日)